

支援者ヒアリング・当事者ヒアリングの概要 (中間報告以降実施分)

1. 支援者ヒアリング

※中間報告以降実施分

調査結果（1/2）

■こども・若者が安心して気持ちを表現できるよう配慮したこと、体制の工夫等

- こどもとのコミュニケーションは、言葉を発する前から始まっているので、コミュニケーション前の観察が大事だと思っている。保護者からもこどもの様子（どんな風に出てきたのか等）を聞いて、職員同士でメモで共有している。また、詳しく気持ちを聴けたときは、一度は共感し受け止めて、一緒にどう考えていくかを話すようにしている。
- 避難している当時はこどもの今の気持ちをそのまま聞き取るスタンスでこどもと関わっていた。
- こどもは共通して大丈夫と言うが、顔が大丈夫という顔をしていない。大人にあまり迷惑をかけないで過ごそうとしている様子もあった。こどもたちの素直な気持ちを聴くうえで、事前に気持ちをほぐしていくことは必要だった。被災した当時の状況を再現して遊ぶこどもも多かったが、遊びを通じて、自分の中に落とし込む、気持ちの整理を実施していると感じたので、こどもの遊びからも気持ちを読み取る材料になった。
- 全体でこどもの意見を聞き取るのは難しく、リスクがある。思いはこどもそれぞれで、普段の学童の生活に戻る際にも、こどもたちはさまざまな状況に置かれていたので、集団で声掛けして対話していくよりも個別の状況でその子が話したくなることを待っていた。また、現状の気持ちに寄り添うことを意識していた。
- 職員間で保護者の方からの情報、地域の情報などの情報共有を密にして、こどもの様子をしっかり観察していた。
- 発災後、地域の学童連絡協議会に連絡をして、大船渡市の学童関係者に相談し、周辺の学童にりょうりキッズのこどもたちを分散して預かってもらうことになった。職員が順番に見回って、こどもの様子を見ていたことで、こどもたちも顔見知りの大人が来てくれたことで安心して楽しんで過ごせていた。
- 平時からだが、こどものつぶやき、行動に表れる部分を否定しないで、受け止めている。まずは共感することを実施している。

調査結果（2/2）

■振り返り、提言等

- 避難訓練時や平時から他地域での災害に他人事ではなく、自分事として考えて子どもたちに発信しており、それについて、災害時こうだったねということを実感に伝えることを心掛けている。
- 月1回実施する避難訓練の際や、おやつの時間に今こういう災害があって、小学生の子もこういう大変な思いをしているということを伝えている。また、避難訓練時には実施した避難訓練に関して子どもへの振り返りや評価を実施している。
- 職員自身も避難生活を送り気持ちが安定しないなかで、子どもを支えていく活動にかなりのエネルギーを使ったので、精神的負担を感じていた。日々、子どもの心身の健康を確認していたが、やはりマンパワーの不足を感じた。
- 学生ボランティアが公民館に1区画設けて子どもと遊んでくれていた。楽しんでいる子どももいる中で、幼児は気後れしてしまい読みたい本があっても混じれない状況も見られた。平時通り興味のあるものに触れてみるという静かな遊びや、各子どものペースで過ごせることがとても大事だと感じた。
- 一人の職員がフォローできることにも限りがあるので、平時から横のつながりをもって、子どもの気持ちに寄り添う機会ができれば良い。カウンセラー等の子どもと関わったことがある人が子どもの気持ちをほぐしてくれたり、子どもと保護者の相談出来る窓口があれば心強いと考える。
- 避難時に不登校がちな子どもへのフォローが手薄になっていた。学校でもその子のことをフォローできていなかったのではどのようにフォローしていくかが課題。
- 2025年8月に岩手大学の准教授船戸先生が（東日本大震災時にも活動していた）、今回の火災でも学生ボランティア（東北地区）の団体、大船渡市内からの高校生も交えて、学童の子どもたちとともにベンチ作りを実施してくれた。そのベンチは地域の夏祭りに活用したり、仮設住宅にも配置している学童の前にも2台ほど寄贈しており、それをみるたびに子どもたちは楽しかったという発言をしている。新たに子どもが人の繋がりのおかげで感じる活動となった。
- 大人が良かれと思って意見を言いすぎたり、管理しすぎたりすると子ども自身が、自分事として考える力を失っていく側面がある。子ども自身に考えてもらいながら「こんなときどうしたらよいか」「どう考えたらよいか」を子どもに問いながら進むことが大事。このような積み重ねが、大人がいなかったときに命を守る行動につながる。

調査結果（1/2）

■子ども・若者が安心して気持ちを表現できるよう配慮したこと、体制の工夫等

- 子どもたちの意見を聴くということは平時からコミュニケーションがとれているという前提。なにか特別子どもたちに聴くということではなく、平時から「あなたたちを守るからね」ということは伝えていた。そのため、非常時にも職員についてきてねということ伝えていた。
- 平時からの会話のなかで、子どもが気になることを言ったら職員内で共有することを大事にしていた。子どもの様子が普段と違うよ、ということがあれば、ただそばにいてあげるということをした。
- 子どもの気持ちをキャッチしたら否定しない。
- 支援物資でホットプレートをもらったので、子ども自身がおやつをつくったりしていた。子どもたちには、もらうだけでなく、自分達でつくることも大事にさせたかった。支援されるのが当たり前で、もらうのが当然と思ってもらいたくなかった。自分たちができることは自分たちですという方針。
- 様々なボランティアの人がはいてくるなかで、2か月間毎週土曜日にボランティア活動を実施してくれた団体があった。少し間をあけてまた来てくれるということが2年くらい続いた。継続的に続くともども達も楽しみにするようになるし、1回きりのボランティア団体よりも、継続的にきてもらえる団体のほうがありがたかった。

調査結果（2/2）

■振り返り、提言等

- 東日本大震災の際、施設が全壊してしまったが、保護者からの早く学童を再開してほしいという声にこたえるため、職員自身にて場所探しを実施したため、早く学童を再開できた。
- 現在活動している場所は、今後災害が起きた際にも、こどもの居場所として運営するという計画がある。
- ボランティアに来てくれる団体も様々な団体が出て、自分のやりたいことをやってすぐに帰ってしまう団体もいた。また、受け入れ時にこの人心配だな（ボディタッチ等）という人も少ないがいる。
- ボランティアを受け入れる側としては、受け入れ基準を作成することは難しいと考える。個人ではなく、団体だとネットで調べ情報を得ることもできるし、ある程度教育されていると思ってしまう。また、個人ボランティア数名が何人かで組んでボランティアを実施しているという人もいるので、その受入可否は難しい。
- 発災直後は、ボランティアに来てもらえるだけありがたかった（こどもを楽しませたい気持ちが強かった）ので、こどもへの悪い影響までは考えられていなかった。リスクを考えるなかで今後、これだけは守って一読してほしい文章等があれば、ボランティア受け入れ時にお伝えすることはできる。
- 学童は、小学校の先生とちがいで、ずっと交流が続くので、こどもたちにとってとても大事な場所。
- 東日本大震災直後、Amazonでの被災地リスト投稿にて物資を支援いただいた個人の方には、すべて礼状を送った。そのつながりは今でも続いており、山林火災の際も心配しておやつを支援してくださったりという事例があった。そのため、支援してくれた方に感謝の気持ちと元気な姿を届けるため、SNSにて活動を発信している。

2.当事者ヒアリング

※中間報告以降実施分

■被災したとき、どんな気持ち、思い、意見、考えがありましたか。

- ライフラインが止まったり、食料も思うように手に入らない状態だったため、いつ元通りになるかが気になっていた。ライフラインが通ったことで、津波の様子が分かり、身近な場所が津波被害に遭っていたため、心配の気持ちが大きかった。（東日本大震災・小学校高学年）

■災害が発生したあと、だれかに自分の気持ち、思い、意見、考えを伝えたいと思いましたか？

- 大学に入学したばかりだったが、教材やパソコンがすべて流され、目の前の生活が送れない状況だった中、悲しいとか辛いみたいな気持ちを持つ前に現実がやってきてしまい、自分の気持ちを考える余裕や時間がなかったため、伝えたいという気持ちがなかった。もし、虚無感みたいなものを誰かに伝えたかったという観点だと、友人に伝えたいと思っていた。（令和2年7月豪雨・大学1年生）
- 意見を言うというよりかは、どうしたらよいか分からず大人からの指示待ち（学校では先生の指示、家では両親頼り）だった。（東日本大震災・小学校高学年）

■あなたの気持ち、思い、意見、考えをつたえるとき、それを「伝えやすい」と感じることはありましたか？

（相手やシチュエーションなど）

- 必要以上にかわいそうという接し方をされないほうが事実を伝えやすい。被災したことをディスアドバンテージにされたくないという気持ちがあるため、被災したことを事実として受け止めてくれる人はありがたいと感じていた。（令和2年7月豪雨・大学1年生）
- 日頃から自分の気持ちをすぐに伝えていたが、その都度対応してくれていた大人が多かった。そのため、平時からの「言ったら何か反応がある」という信頼感が大きかったため、非常時でも伝えづらいと感じることはなかった。（東日本大震災・小学校高学年）

■あなたの気持ち、思い、意見、考えをつたえるとき、それを「つたえにくい」と感じることはありましたか？

- 半年近く、複数の親戚で暮らしていたが、血はつながっているものの、それまでの生活スタイルが全然違うなかで、ストレスが溜まっていった。一方で、家族だから悪くは言えないという気持ちで、吐き出せなかった。（令和2年7月豪雨・大学1年生）
- 大学の職員の方もいろいろ気を使ったださり、授業が受けられなくなったことに対する補償を考えてくれてはいたが、「被災してない人」とのギャップを感じ、補償内容も時間的に対応することが難しい内容だったと感じていた。（令和2年7月豪雨・大学1年生）

■ 災害のあと、あなたの思いや意見が、おとなからのしえんや、まちづくりなどに生かされたと思うことはありましたか？

- 自治体に対しての実感はないが、民間に対してはある。例えば、夏の盆踊り大会を復活させたり、キッチンカーや仮設住宅、プレハブを使った飲食店が集まった広場が出来て、「人の気持ち」がもとに戻り、良い方向に向かっているという実感があった。（令和2年7月豪雨・大学1年生）
- 隣町が津波被害に遭ったため、学校を通して松の植樹作業ボランティアに参加した。何かしたい、何かしなきゃという気持ちはあったため、形になってよかったという思いがあった。（東日本大震災・小学校高学年）

■ 防災活動をしたり、避難計画をたてるときには、どのような機会があるといいですか？

- あらかじめ予想される、非常時に子どもが考えること、思うこと、ストレスを感じるだろうと予想できることがあれば、それらに対して対策を立てておくことは有用と考える。（令和2年7月豪雨・大学1年生）
- 非常事態が発生した際に、学校の避難訓練通りに行動できるかということも子どもはパニックになってしまうため、難しい点もある。一方で、子どもは非常事態が発生した際には、パニックになるものということを大人が分かっておく必要がある。（東日本大震災・小学校高学年）

■ 避難生活や復興（ふっこう）の中で、大人に気をつけてほしかったこと、サポートしてほしかったことなどがあれば、教えてください。

- 自分の家ではない場所で過ごしたり、慣れない環境に対する居心地の悪さに対して、子どもはフラストレーションがたまるため、ストレス解消できるような場所（地域が解放しているスポーツをやるような施設、図書館等）があれば良かった。（令和2年7月豪雨・大学1年生）
- 復興活動に参加したい人はたくさんいたが、コロナの影響もあり、外からのボランティアに対する拒否が多くあった。その中でも、今日参加できるボランティアの人をどの地域にどのくらいの人が必要かということを安全面にも配慮できる大人が采配できるプラットフォームがあれば良い。（令和2年7月豪雨・大学1年生）
- とにかく怖いという気持ちがあるので、何が欲しいとか整理できる状況にすらない、ということを大人には理解してほしい。怖い・不安の気持ちが先にあるということを大人が気づいてサポートしてほしい。（東日本大震災・小学校高学年）

■ 今後、災害があったとき、あなたの気持ち、思い、意見、考えを伝えやすくするには、どのようなしくみや機会、サポートがあればよいと思いますか？

- 学校にいれば先生、家にいれば両親という身近な大人がかなり大きい存在であり、子どもにとってはその人を頼る事しかできない。そのため、大人は子どもに頼られる準備をすることが必要。（東日本大震災・小学校高学年）
- 子どもはどのような状況にあっても、遊びたくなるため、普段通りに遊べる場所があることが大事。（東日本大震災・小学校高学年）

※ () 内は発災当時の年齢